

11 水走遺跡の遺構と遺物

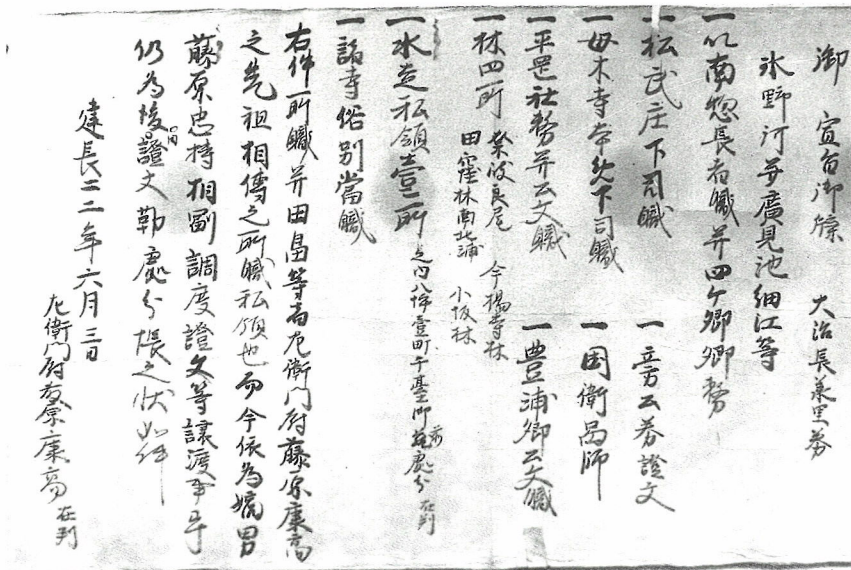
水走遺跡は水走・川中・吉田船場・中新開に広がる、弥生時代から江戸時代に亘る複合遺跡である。この遺跡は昭和55（1980）年の鉄道・高速道路建設工事に先立つ試掘調査によって確認された。この地域は「水走」の地名が示すように、五条町に館を持ち、特に平安時代末期から室町時代にかけて活躍した水走氏によって開発され、所領されていた所と考えられていた。このことは周知の『水走文書』の中の寿永3年（1182）付けの「有福名水走開発田事」にも記されており、この地が代々相伝されていたこともその「譲渡状」などから窺える。

今回の発掘調査では11世紀後半から12世紀前半の堰・堤防・大溝や整地層などが検出され、その開発状況が判明した。そして13世紀

中葉ごろから濠を有する集落（柱穴群・墓・土坑などの遺構と多量の遺物を検出）が形成され、15世紀代まで及んでいた。しかし、16世紀代後半になると一部を除いてハス田と化し、遺跡状況からその盛衰ぶりを裏付けることができた。



水走家墓塔
（市史跡）
五条町所在、
文化8年（1811）
9月に水走飛騨
守忠良が造立。
高さ約3mの五
輪塔。



藤原康高譲渡写
（『水走文書』）
嫡男忠持に対
し、建長4年
（1252）に相続させ
た目録である。こ
の中に「水走私領
壺所」が見える。

『水走文書』は寿永3年（1182）から享和9年（1804）にわたる約40通の文書で、所領・軍役関係の解状・請文（平安時代末期～鎌倉時代初頭）、所領・所職の譲状・目録・綸旨（鎌倉～室町時代）、任官・叙位に対する宣旨・口宣案と位記（江戸時代）、枚岡神社に対する寄進・禁制・社領（江戸時代）、水走氏の系譜の5種に大別できる。

縄文時代～奈良時代

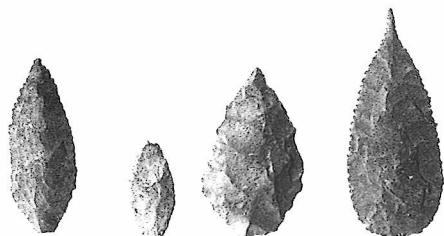
縄文時代の遺物としては、後期の深鉢片・土錐が海成層より出土しただけである。弥生時代では、遺跡西端部を中心に溝などの遺構と前期～後期の土器・石鏃などを少量検出した。古墳時代には土師器・須恵器が若干出土したのみである。

奈良時代になると開墾に伴う掘削跡が各所に見られ、土師器坏、ミニチュアのカマドセット、鏃、刀子、鎌などの鉄製品、刀子の柄などの木製品が出土した。

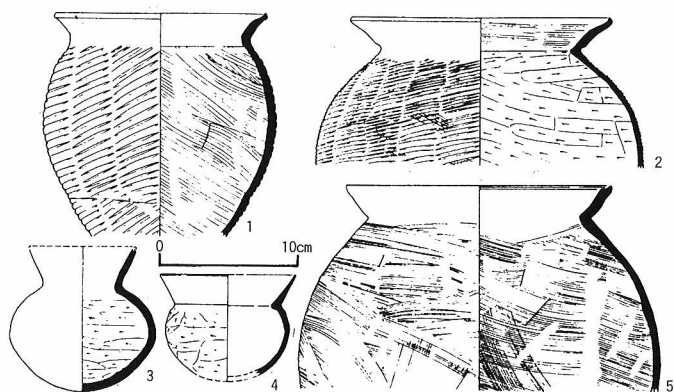
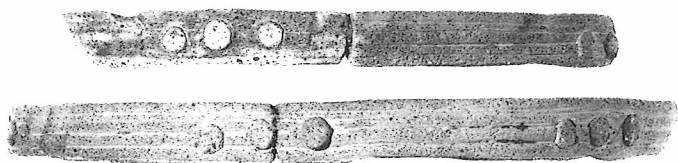


縄文土器—後期・中津式深鉢

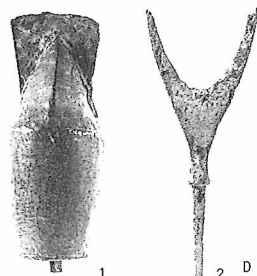
石鏃 弥生時代



弥生土器 壺口縁

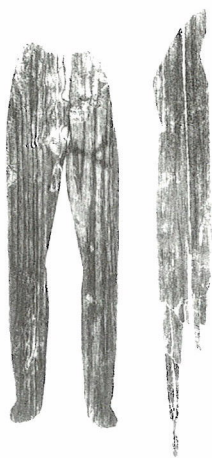


- A. 1 弥生時代後期 甕
2 庄内式 甕
3～5 布留式 壺 丸底壺 甕
B. 1 須恵器
2 製塩土器
C. ミニチュアのカマドセット
D. 1 鉄鏃 2 雁股式鉄鏃



11世紀後半～12世紀初頭

水走氏による開発事業が開始された時期である。本遺跡東側に南東方向から流れていた自然流路内に、堰・堤防を築いたのち盛土を行ない、開発地域（現在の水走から川中―旧吉田川東岸周辺）を確保した。



堤防遺構内出土人形



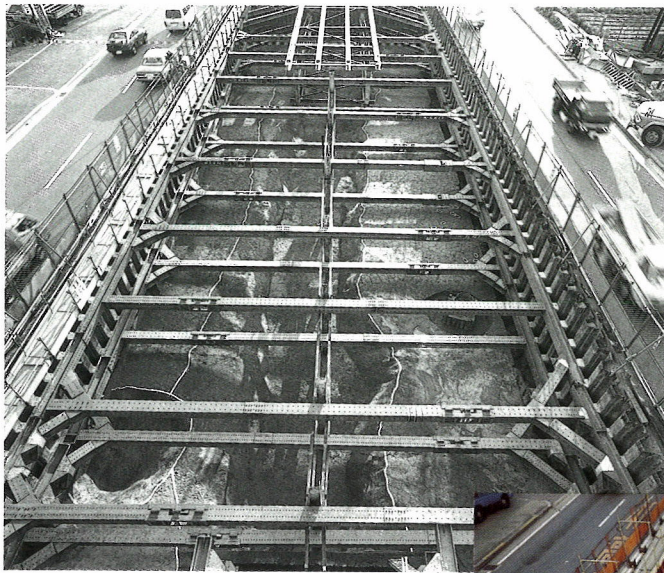
堰(右上)から堤防へ



堤防状遺構

堤防の構築方法

南東から北西方向に流れていた自然流路に対し、その流路内にほぼ直行する形で長さ1.5～1.1mの木または竹の杭を0.5～0.9m間隔に打ち込み、その杭列に竹を1～3段渡して堰を設け、流れを緩めることによって砂を堆積させた。その堆積した砂層東側斜面に葦束を貼り付け、一部には竹・木を渡して砂の堆積を確保し、その上に盛土を行なって堤防を構築したものと考えられる。この堤防によって流路を北方向に変え、旧吉田川との間の開発に着手した。



大溝(12世紀後半)

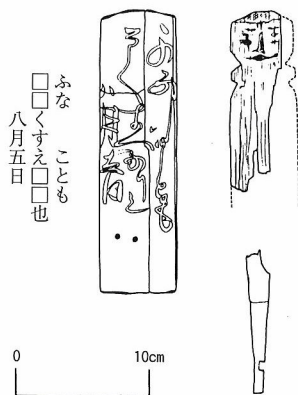
12世紀前半～14世紀

堤防によって確保した地域に幅7～8m、深さ1～1.3mの大溝を西から東そして北方向に設け、伏水・湧水などを排水させた後、盛土を繰り返して土地を安定させた。そして13世紀中葉以降にはこの地域に幅約8m、深さ0.7～1mの濠を有する集落が営まれるようになった。



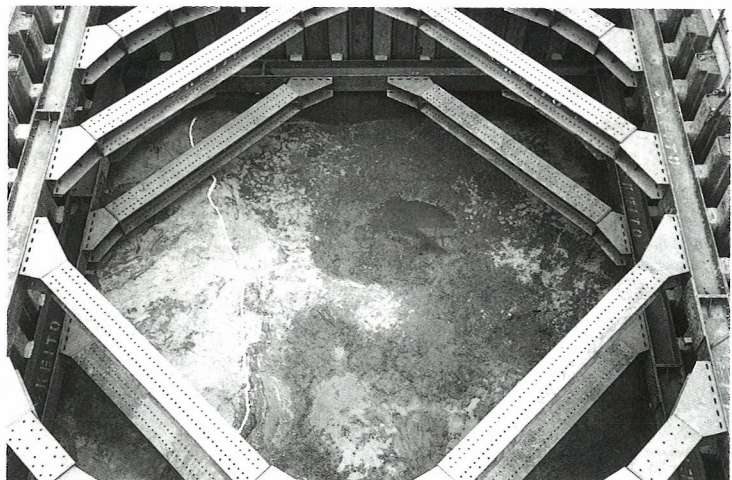
水走遺跡最盛期の瓦器碗・土師器皿

2期の環濠と柱穴群・土坑など(13世紀中葉～)



落ち込み出土木製品(木簡・人形)

落ち込み(12世紀)



土坑墓

東西長1.265m、南北長0.635m、最深0.26mを測る不整の楕円土坑内に、身体をほぼ水平に横たえ、両脚の膝を折曲げた仰臥屈葬の成人男性が埋葬されていた。また、左腕上部から腰部にかけて、土師器小皿6点・瓦器碗1点が供献されていた。



土坑墓

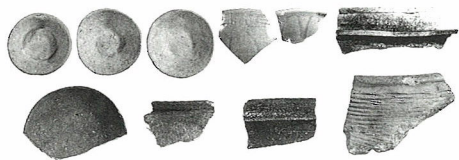
墓は1基のみで、出土遺物から13世紀前半に営まれたもの。大溝の活用時期にあたり、調査地域周辺における濠を有する集落が形成される以前の墓である。



供献土器



しがらみ土坑



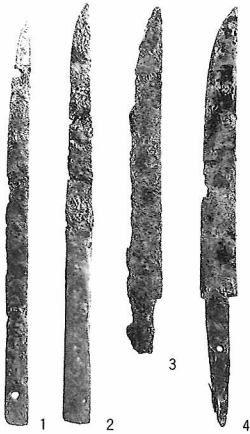
土坑内出土遺物

しがらみ土坑

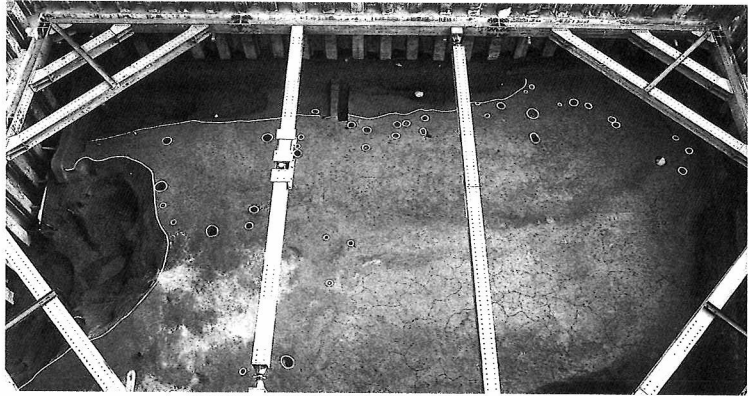
径約7m、深さ1mを測る不整の楕円土坑内にL字形のしがらみを設けてあった。しがらみは50～70cmの木杭を打ち込み、それに竹を3～4段に渡したものである。土坑内にはタニシ・シジミなどの貝遺体群があり、下層からほぼ完形の土師器小皿3点が出土していることから、特殊な目的のため-祭祀など-に使用され、上層で多くの瓦質土器片が出土し、後にはゴミ捨て場と化したと思われる。13世紀末～15世紀前半まで活用。

建物群の推移

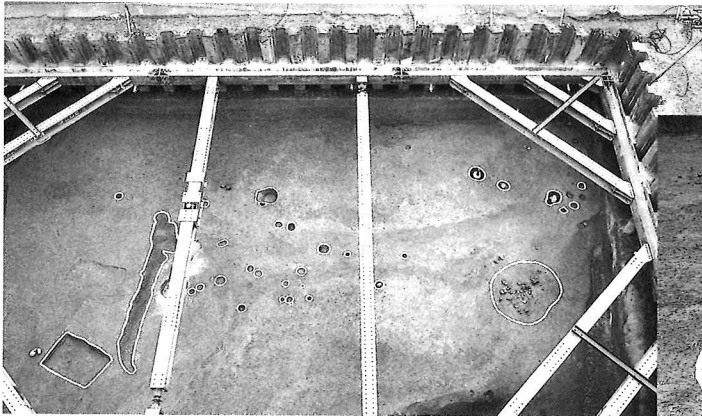
今回の調査においては13世紀中葉から15世紀に亘る柱穴群を3面以上検出した。この地域の開発は11世紀後半から始まっているが、11・12世紀のものは検出されていない。このことは堰・堤防を構築して土地を確保し、排水用の大溝を穿って地盤を安定させてから、建物を建てていったためと考えられる。また、吉田川西岸でも13世紀中葉以降に集落を形成していたことも確認されている。



1.2小柄 3.4小刀
(13世紀後半)



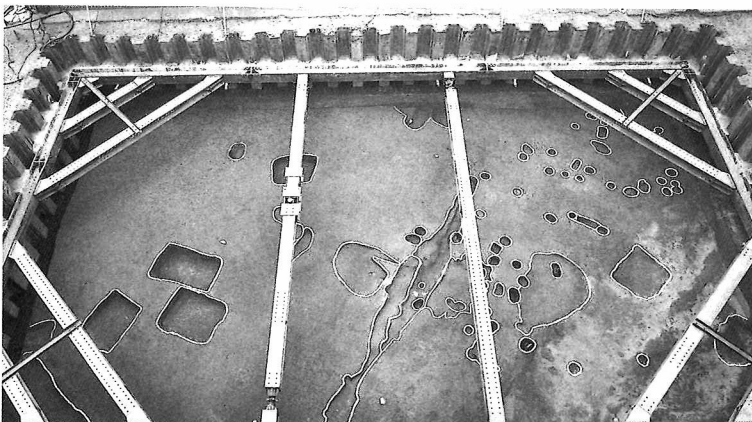
13世紀中葉の柱穴群
・しがらみ土坑・溝



14世紀代の柱穴群・溝



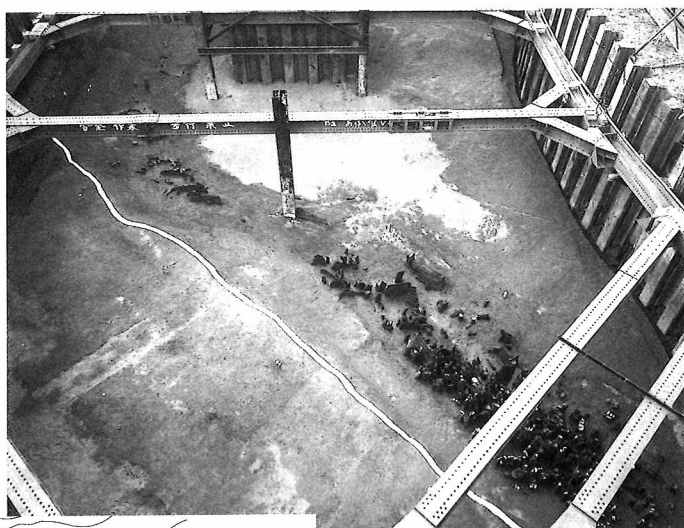
根石・柱根検出状況



15世紀代の柱穴群と土坑・溝、
方形土坑は16世紀代

河川出土の祭祀遺物

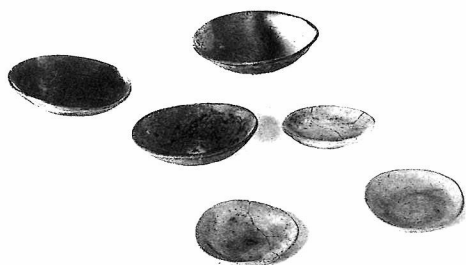
水走遺跡のほぼ中央に旧大和川の一支流である吉田川が北方向に縦断していた。その東岸斜面から鎌倉時代後半の祭祀に使用された祭具―瓦器碗、土師器皿、木製品、貝遺体(タニシなど)が出土した。木製品には矛・刀・剣・矢羽根などの武器形と斎串、箸、櫛などがあった。



旧吉田川東岸と祭具類検出状況

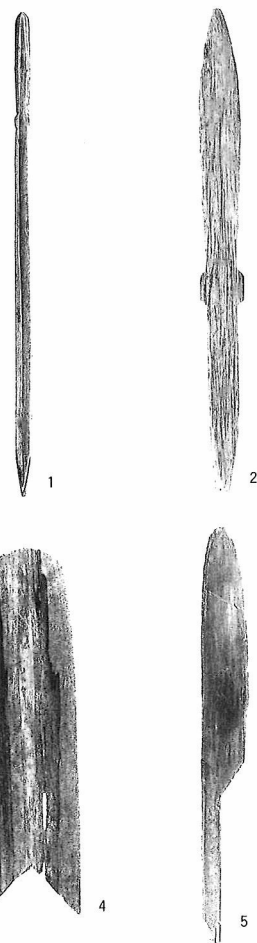


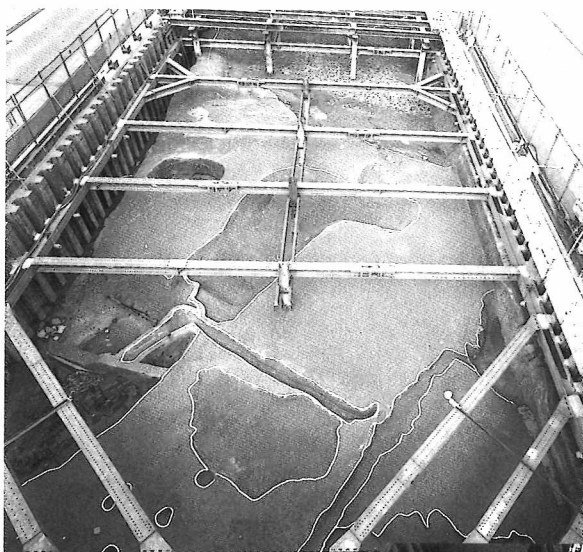
祭具出土状況実測図(1/60)



瓦器碗と土師器小皿

- 1 矛形 2 剣形 3 斎串
4 矢羽根形 5 刀形



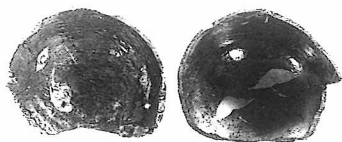
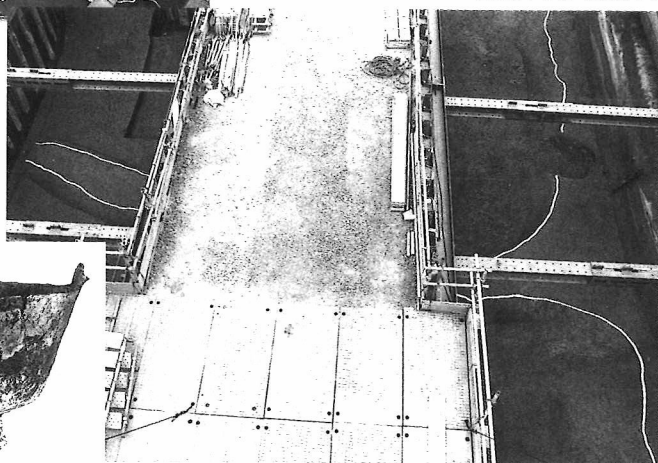


16世紀から18世紀

16世紀になるとそれまでの居住区域で土坑・溝は検出されたが、柱穴は激減する。16世紀後半にはその周辺地域一帯はハス田と化する。ハス田は畦畔を伴い、ハスの実が多量に出土した。この時期の遺物としては漆器碗・皿・曲物・下駄などの木製品・鉄鍋・包丁などの金属製品、土師器皿、陶磁器などがあった。

16世紀前半から中葉の遺構

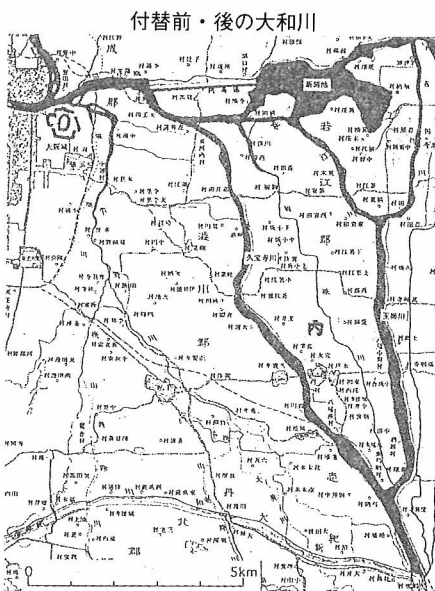
ハス田畦畔(16世紀後半)



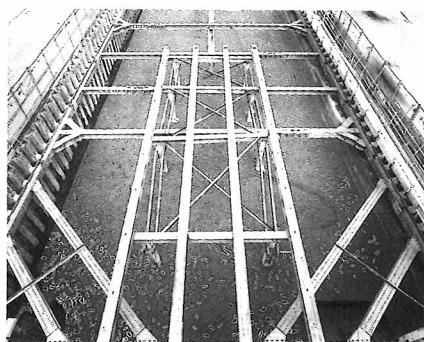
漆器碗 (16世紀中頃)



鉄器
(16世紀末)



17世紀になるとハス田は姿を消して、部分的に水田が営まれるようになるが、元禄17・宝永元年(1704)の大和川付け替え以降、旧吉田川の川床は川中新田として開発され、本遺跡内の多くは水田・畑地と化し、近・現代に至った。(若松・上野)



足跡
(18世紀後半)